

A 2 - 0 6

日本理科教育学会

情意面における評価の研究 PART III その 1

川崎市理科研究サークル

A

○田島 操

○TAJIMA misao

川崎市立久本小学校

B

栗田一良

KURITA kazuyoshi

聖セシリア女子短期大学

C

大場文夫

OHBA fumio

川崎市立宮崎小学校

情意面の評価、認知面との相関、関心・意欲・態度

はじめに

学習指導要領は、自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応する能力を育成するとともに基礎的基本的な内容を重視し、個性を生かす教育を充実することをねらいとして現在実施されている。この改訂に伴い、指導要録も学習指導要領に基づいて学習活動を適切に評価するように改善された。指導要録の改訂の基本的な考えとして、

①学習指導要領のめざす学力観に立つ評価の重視。

②児童の可能性を伸ばす評価の重視。

③指導要録の保存期間等の見直し。以上の3点が挙げられる。

評価内容をみると、次の4つの観点で評価することとしている。

①関心・意欲・態度 ②思考・判断 ③技能・表現 ④知識・理解

これらの観点の順序について、従前のものと比べ逆転している。また、①～④の内容は相互に関連しあっていることは言うまでもない。

本研究では、最上位に位置づけられた情意面である「関心・意欲・態度」の評価を取り上げ、評価のあり方、情意面の評価と認知面の評価の相関、実際の授業において具体的な情意面の評価等について実践し、検討を加えたものである。継続的な研究を行い、実践を重ね、一定の知見が得られたので発表するものである。今回で3回目である。

1. 情意面の評価内容の定義と順序性

新指導要録では、関心・意欲・態度といった情意面の評価が観点の第一になっている。今回の改訂の目玉の一つとなっている。いつしかひとり歩きした感のある「新学力観」とともに、「関心・意欲・態度」の評価について、教育雑誌等で特集が多く組まれるようになった。それらの論文は、関心・意欲・態度の評価の重要性や必要性を唱えているものがほとんどである。実際の授業でどんな内容で、いつ、どの方法で評価したらよいか、また、情意面の評価と他の内容の評価との関連といったことについて示唆を与えるようなものはあまり見当たらない。

そこで、本研究では、一口に関心・意欲・態度といってもそれぞれ内容的、順序性にも差異が考えられるので、下記のようにそれぞれの項目ごとに定義した。さらに、これらの項目が、学習のどの過程でより多く表出するかも分けてみた。

情意 項目	定 義		順 序 性	
	生 活 科	理 科	生 活 科	理 科
興味・関心	身の回りの環境に対して好奇心を持つ。	自然の事象に対して好奇心を持つ。	学習の発端になる。	
意 欲	活動や遊びを最後までやり抜こうとする心構え。	問題を解決するまでやり抜こうとする心構え。	身の回りのことや自分についての気付きなどの学習過程が中心になる。	知識や概念、探究活動（探究の技法）を獲得する過程が中心になる。
態 度	○学習の繰り返しによって定着する規範的行動の傾向性。 ○身の回りの環境を大切にしようとする傾向性。	○学習の繰り返しによって定着する科学的な行動の傾向性。 ○自然を大切にしようとする傾向性。	学習の成果になる。	

2. 研究の成果と考察

○情意面の評価をそれぞれ定義することにより、とかく曖昧であった評価の観点が絞られ、いつどの場面で評価するのかがはっきりしてきた。

○情意面と認知面との評価の相関が相当程度あることが分かってきた。

○態度面と技能面との評価の相関が相当程度あることが分かってきた。

○情意面の評価を行う過程において、一人一人の児童の見方がより正確になり、より深い児童理解につながった。